



江南小だより

八戸市立江南小学校 学校だより
令和2年 6月 29日 発行
通算 第509号

教育目標 強い子になろう

あたりまえの日常を、あたりまえに送れること のかけがえのなさ



校長 花生 典幸

6月に入って、学校はしだいに、以前のような日常を取り戻しつつあります。

6校時まで授業を行い、クラブ活動や委員会活動も再開しました。

業間に行っている運動タイム（マラソン）は、週ごとに時間を延長するインターバル走（最初の2週間は、1分間走って30秒歩くを繰り返す。3週目からは、走る時間を2分間に延長、という具合に少しずつ負荷を上げていく）を実施し、3月以来ずっと運動から離れていた子どもたちに急に無理がかからないよう配慮しながら進めてきています。

毎日くり返す子どもたちと先生方のそのようすを見ながら、“あたりまえの日常を、あたりまえに送れることへのかけがえのなさ”に、あらためて気づかされたような思いがしています。感謝の気持ちに素直に浸っている毎日です。この平穏な日常が、順調に続いていってほしいと願うばかりです。

上に挙げた他に、学校のあたりまえの風景の一つに「遊び」があります。子どもたちは、中休みの15分間と昼休みの20分間（水曜日だけはロングの50分間！）をいつも待ちわび、天気の良い日には、どの学年も目をキラキラさせて校庭にとび出していき、鬼ごっこやドッチボールに汗を流しています。

その姿を眺めながら、「遊びの大切さ」を述べた、印象深い文章のことを思い出しました。少し引用してみます。

——— 自分がやりたいことをやる「遊び」には、とても大きな意義があるとわたしは考えています。やりたいと思うことがあれば、そのためにいろいろなことを考えて達成しようとしてします。それは問題解決能力です。与えられたことだけをやるばかりの体験では、この力は身につけません。なぜなら、すべて大人の予定調和の中だけだからです。そうすると、大人の望む行動や答えを求める生き方になってしまいます。それとは反対に、その子のもっている力を引き出すことが大切なのです。そして、その最初のスイッチは、子ども本人が自分の中で見つけてONにしてほしいのです。

やりたいことを禁止されてばかりいると、抑制された状態が続き、無意識のうちにストレスが溜まります。ある程度の大人であれば、そのストレスを見つけて対応できますが、子どもの場合は、それに気づくこともできずに溜まっています。その結果が、「キレル」とか、「無気力」の元になります。だから、「遊び」は、子どもにとって、とても重要なのです。

金井 聡 氏（学び方を学ぶプロジェクト・自然学校代表）

毎日の鬼ごっこは、子どもたちを、学年の枠を越えて結びつけています。追いかけ、追いかける中で、暗黙のうちに配慮や思いやりが生まれ、温かい自然発生的な交流があちこちにつくられていきます。遊びのかけがえのなさ（意義・価値）についても、強く実感させられた6月でした。

